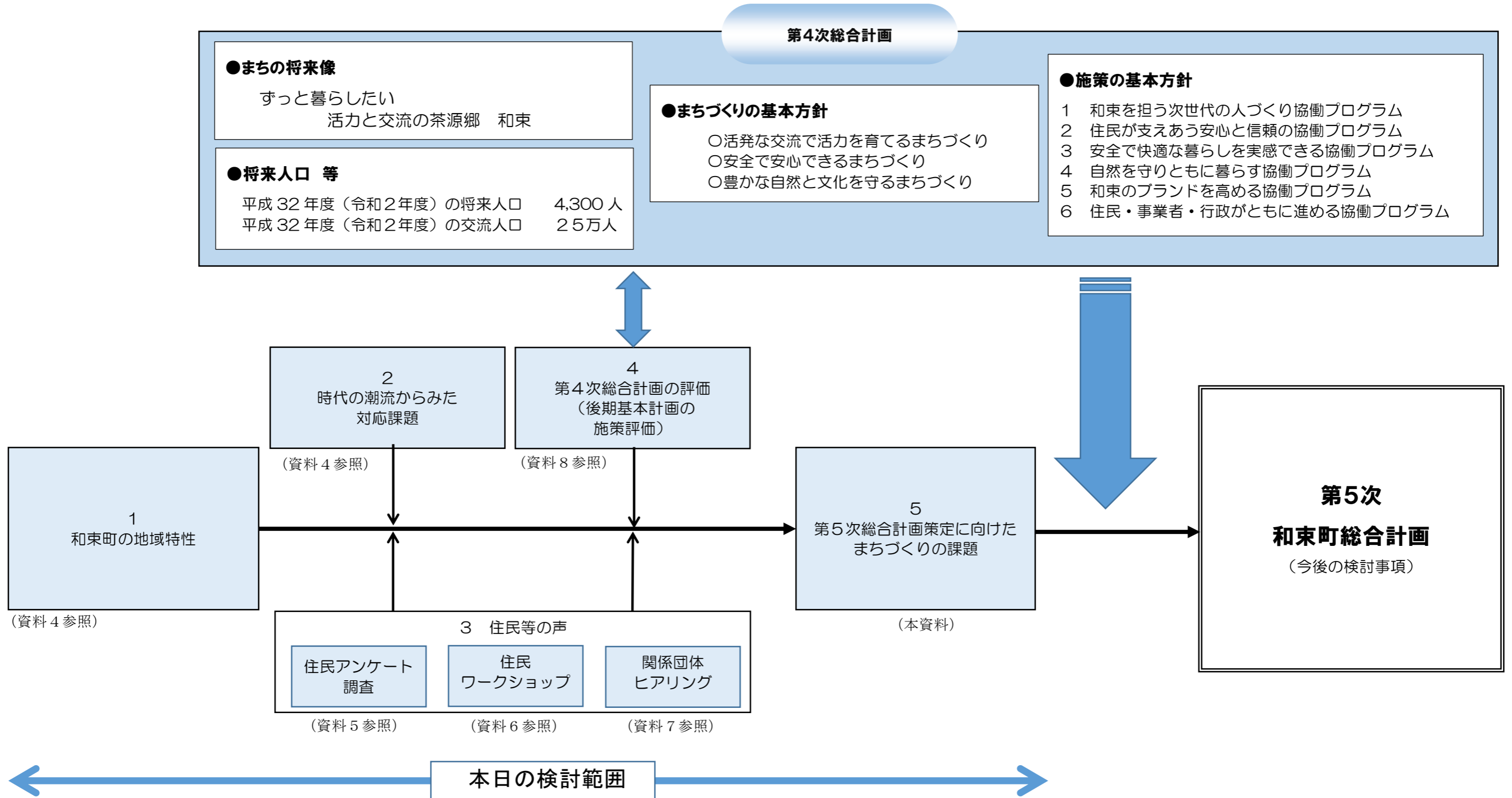


本計画は、令和3年度～令和12年度までの10か年の「総合計画」を策定するものである。

そこで、近年の和束町の動向及び和束町を取巻く社会・経済環境の動向を探るとともに、住民アンケート調査・住民ワークショップ・関連団体ヒアリング等による住民ニーズの把握や現行計画（第4次総合公計画・後期基本計画）の検証等により、第5次総合計画策定にあたっての主な課題の抽出を行った。



1 和束町の地域特性の総括

<位置的特性>

○近畿圏の中心に位置し、和束町の半径約100km圏域には、5つの指定政令都市（京都市、大阪市、堺市、神戸市、名古屋市）と4つの県庁所在地（奈良市、大津市、和歌山市、津市）を抱える、大都市圏に近い中山間地である。

<歴史的背景>

○古墳時代からの歴史を有するが、奈良時代には「和束」という言葉で文献にも登場する。
 ○鎌倉時代末期にお茶の栽培が始まり、江戸時代には皇室領となったことで、お茶も京都御所に納められるようになる。
 ○昭和29年に「和束町」が誕生し、昭和31年に湯船村を合併し、今日に至っている。

<人口の動き>

○昭和30年には7,614人（国勢調査）であったが、その後減少傾向が続き、平成27年には3,956人となっている。
 ○少子高齢化は顕著に進んでおり、年少総人口（15歳未満）は8.3%（京都府：12.3%）、老年人口（65歳以上）は40.0%（京都府：27.5%）となっている。

<産業の特性>

○産業別就業人口の構成比は近年大きな変化はなく、第一次産業25.2%（京都府：2.1%）、第二次産業21.3%（京都府：21.5%）、第三次産業53.5%（76.4%）と第一次産業の就業割合が高い。
 ○基幹産業である茶業をみると、平成30年で1,406トンで、京都府の荒茶量の約5割を占めている。
 ○また、茶畑景観が平成20年に京都府の景観資産の文化的景観第1号に登録されている。
 ○工業は、概ね横ばいの状況にあり、事業所数で13件、従業者数で182人となっている。
 ○商業は人口の減少が購買力低下にも繋がり、年々厳しい状況になっている。
 ○観光客の伸びが大きく、平成30年で約18万人の入込客があり、今後交流産業としての展開が望まれる。（コロナ禍により、現状は激減している）

<交通特性>

○主要地方道木津信楽線が町の中央を東西に走っているが、集落を結ぶ生活道路は線形や道路幅等の問題を有している。
 ○鉄道はなく、加茂駅まで奈良交通バスが運行している。
 ○奈良交通バスの利用者数は年々減少しており、令和元年では78,977人（1日平均258人）となっている。

<生活圏の広がり>

○通勤・通学（平成27年国調）でみると、町外への流出978人に対し、町内への流入401人で、大きな流出過多となっている。また、町内での通勤・通学が1,072人であり、町内で通勤・通学する人とほぼ同じ規模が、町外へ流出していることとなっている。
 ○方面別にみると、町外の流出先は木津川市（248人）が最も多く、次いで奈良県（207人）、一方町外からの流入先は、木津川市（183人）が最も多く、次いで奈良県（56人）となっている。

<福祉環境>

○少子高齢化に伴い、介護や医療需要が確実に伸び、受入れ施設においても厳しい状況も出始めており、健康寿命の延伸や、地域ぐるみでの支えあい体制の強化が求められている。

<教育環境>

○小学校、中学校がそれぞれ1校で、生徒数は平成27年で223人が、令和2年では180人に減少している。

<財政環境>

○財政力指数は0.21（平成30年）と決して良好な状況ではなく、経常収支比率も96.4%と高くなっている。また、実質公債費比率は年々減少傾向（11.3%）にあるが、目安である10%は超えている。

<その他類似都市との比較等>

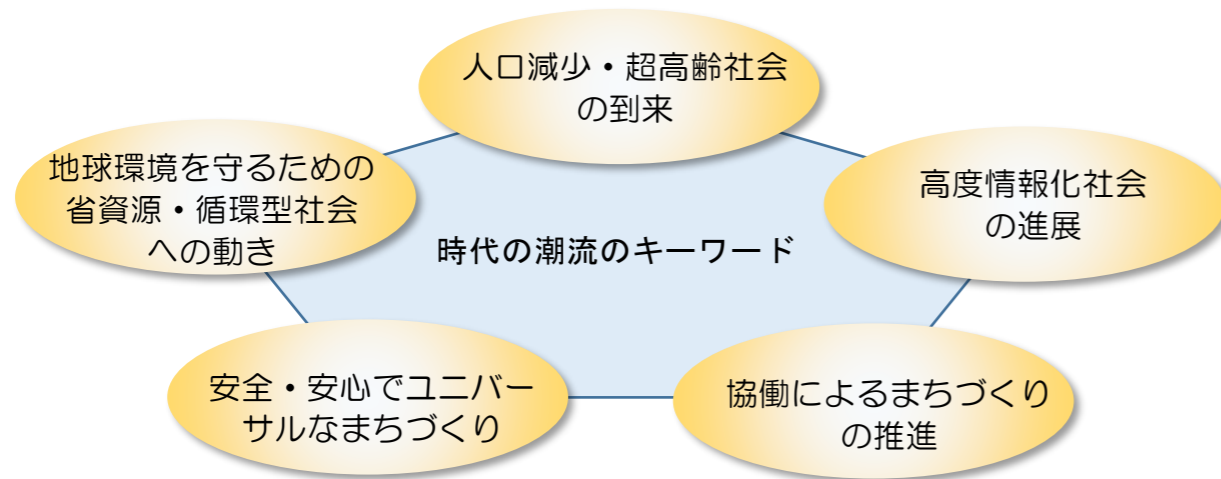
○人口減少率が、笠置町に次いで高くなっている。
 ○お茶を中心とする第一次産業の割合が周辺地域と比べても高く、歴史的にも優位性がある。
 ○観光客数の伸びでは周辺地域の中では最も高く、犬打峠トンネルの開通によりさらにアクセス条件が良くなる。

【地域特性からみた課題の総括】



- ① 優れた自然環境や茶畑景観は本町の財産であり、次世代への継承していくべきものである。
- ② 人口の増減を決定づける自然・社会動態は共にマイナスとなっている。この人口減少の抑制には自然動態（出生・死亡）の面では、出生数の増加対策、健康寿命の延伸対策等が必要であり、社会動態（転出・転入）の面では、転出を抑制するための定住環境や雇用環境の充実、転入を促進するための移住やU・I・Jターン対策等の強化が必要である。
- ③ 産業面では、お茶が基幹産業であり、現在も取組まれている後継者の育成、販路の拡大、加工食品の開発等をさらに進めるとともに、観光と結びついた様々な展開を検討していく必要がある。また、犬打峠トンネルの開通インパクトを効果的に受け止めるために、新たな物流需要への対応、沿道型サービス施設の誘導、さらには町外の周辺地域への通勤可能性の広がりを活かした雇用の場の確保対策等が必要である。
- ④ 観光はお茶との関連も含め、地域への波及効果が大きい産業であり、現在の取組をさらに拡大させ、お茶とともに本町の基幹産業の一つとして捉えていく必要がある。
- ⑤ 住民福祉の面では、現在子育て支援についてわが国でもトップランナーともいえる対策を講じており、これを一つの特徴とするとともに、高齢者にとっても生涯にわたって安心して暮らせる仕組みづくりをさらに強化していく必要がある。
- ⑥ 今後のさらなる高齢化を含め、住民の移動手段（通学・通勤・生活等）の充実を図っていく必要がある。
- ⑦ 犬打峠トンネルの開通により、町が新たなステージに入ることになり、“小さいからこそできるまちづくり”に取組み、“和束”のブランド力を高めていく必要がある。

近年の時代の潮流として、次の5つのキーワードから捉えてみる。



これらの動きに対する本町での対応課題は、以下のように捉えられる。

① 人口減少・超高齢社会への到来

本町においても人口減少は続いており、このままでは、20年後の2040年には人口が2,000人を下回り1,816人になるという推計がなされている。今後は、健康寿命の延伸とともに、若者や子育て世代などの若い世代の定住性を促し、子どもを育てやすいまちづくりを進めていくことが必要となる。また、定住人口のみならず、交流人口や関係人口の拡大によるまちの活性化を図っていくことも重要な課題になる。

② 地球環境を守るための省資源・循環型社会への動き

本町は、土地利用からみても自然環境地域の占める割合は非常に高く、特に一面に広がる茶畑は町の財産となっている。平成20年に京都府の景観資産の文化的景観第1号に登録されるとともに、令和元年に「和東町景観条例」を制定し、景観だけではなく地域の自然環境の保全への積極的な取り組みを進めている。今後とも、茶畑を含む美しい自然をいかに次世代に引き継いでいくのが重要な課題となり、「環境との共生先進地」的な取組が重要と思われる。

③ 高度情報化社会の進展

本町では、コロナ禍対策として小学生へのタブレット配備などを進めているが、ICTを有効に活用するための基盤環境は必ずしも十分とはいえない。情報技術は高齢社会や移動に困難を伴う中山間地にとって、極めて重要なツール(道具)にもなるものである。また、現在町が取り組んでいるインバウンド対策の面でも必要なものであり、今後積極的な高度情報化への対応が求められる。

④ 安全・安心でユニバーサルなまちづくり

本町は、昭和28年8月には、集中豪雨が原因で木津川の支流で発生した南山城大水害により多大な被害を受けたが、今後も想定外の自然災害への対応が求められる。また、多くの山間地集落もあることから、積極的なICTの活用により、距離を克服して、今般のコロナ禍への対応を含め誰もが安全で安心して暮らせるまちづくりに積極的に取り組む必要がある。

⑤ 協働によるまちづくりの推進

本町は、今後の交通網の整備により一定程度の流入人口の増加は見込まれるが、わが国共通の流れである人口減少や更なる高齢化に伴い財政状況はより厳しくなることが予想される。以前から居住されている住民だけではなく、新たに町内に移住して来られる住民も含め、様々なニーズに対応していくためには、行政だけではなく、「町民力」ともいえる、住民やボランティア団体を含め、地域ぐるみでのまちづくり体制を構築していくことが必要となる。

【住民アンケート調査】

今後のまちづくりに関するアンケート調査を行った。

- 町民 (18歳以上の町民、1,500票配布、352票回収)
- 中学生 (和東中学校に通う全生徒 57票回収)

この結果から、今後のまちづくりへの課題は、以下の点として捉えられる。

① 「定住意向あり」の高さを実際の定住にいかにつなげていくか

町民アンケートでは「定住意向あり」が全世代で高いにもかかわらず、転出超過に歯止めがかかっていない。また、独身者の結婚後の居住意向については「わからない」が高く、「20歳代以下」の独身者にいたっては、「住み続けたくない」と考えている割合が3割にのぼっている。

一方、中学生アンケートでは、将来の定住意向について『定住意向なし』が『定住意向あり』を上回っており、将来働きたいと思ったときの状況をどう考えるかについても、「和東町以外の場所に住み、仕事も和東町以外の場所でみつきたい」の割合が高く、厳しい評価となっている。若い世代が進学や就職を機に町の外へ出ることは必ずしも否定的なことではないが、「戻ってきたい」と思わせるまちづくりに取り組むことが大切となる。

② 町民や中学生が転出したい理由として挙げている要因をいかに克服していくか

町民も中学生も転出したい理由として「道路や交通面で通勤・通学・買物などが不便だから」を第一に挙げている。市場原理(需要と供給のバランス)の中で、全てを満足するのは難しいが、新たなコミュニティビジネス的な発想で、「住民力」を活かして、地域ぐるみで相互を支えあう仕組みづくりを検討していく必要がある。

③ 町民が求める将来像に向けた展開をいかに図っていくか

町民や中学生が求める町の将来像としては「自然環境が豊かでふるさとの景観が美しいまち」、「道路やバス路線が整い、買い物や通勤通学に便利なまち」「安心して暮らせる健康・福祉のまち」が挙げられている。「自然環境や景観(茶畑)」は本町の基本的財産であり、住民も十分にそれを認識している。この環境の中で、「便利さと安心」をいかに充実させていくかが課題となり、②でも掲げた従来の発想での便利さや安心ではなく、町・住民・事業者が一体となった、「和東版」の方策を検討する必要がある。

④ 町民との協働のまちづくり体制をいかに構築するか

町民のまちづくりに対する関心は非常に高く、7割以上の町民が何らかの関心を持っている。しかし、協働のまちづくりのために必要な取組として「まちづくりについて積極的に情報を提供する」が最も高くなっていることから、町民は情報の提供が不十分と感じている可能性がある。これは、他の自治体でもみられる現象で、「町(行政)が何をやっているのか分からない」と感じている住民が多いのが現状である。町としては、「広報やHPに掲載しているから必要な情報は十分に提供している」と考えがちであるが、情報化社会の中で大量の情報が日々流れている今、すべての情報を受容することは容易ではなく、無意識のうちに人々は情報の取捨選択をしている。情報提供の方法や(SNSやアプリの活用)や頻度、内容等を今一度精査し、町民にキャッチされる情報の提供が協働体制構築には重要となる。

3 住民の声（その2）

【住民ワークショップ】

- **和東町の良いところや自慢できることは**
 - ・ 自然環境のすばらしさと、茶の栽培がもたらす特徴ある地域景観
 - ・ 古くからの歴史・文化や、茶源郷まつり等のお祭り
 - ・ 「お茶のまち」としてのブランドや歴史
 - ・ 子供の数は少ないが、子育て支援は全国ベースでもみても非常に手厚い
 - ・ 関西圏の真ん中にあり、周辺の大都市圏へアクセスしやすい位置にある
- **一方、和東町の問題点や課題は**
 - ・ 茶業界以外では、和東町の知名度は非常に低い
 - ・ 少子高齢化が急激に進行し、人口減少が続きこのまま続くと消滅しかねない
 - ・ 働く場所が少なく、生活面（買い物、医療・福祉、住居、交通 等）での各種機能も脆弱なので、定住する条件が弱い
- **これらを踏まえ、今後のまちづくりの基本的な方向は**
 - ・ 「お茶」の分野を除き、和東の知名度は非常に低いのが現実
 - ・ まずは、「和東のアピール」を様々な形で展開すべき
 - ・ キャッチフレーズ的には“本物のお茶に出会えるまち和東”
 - ・ また、今後の人口対策を踏まえ、子育て支援がどこよりも手厚いことに加え“小さいまちだからこそできる、ユニークな子ども教育のまち”を目指す

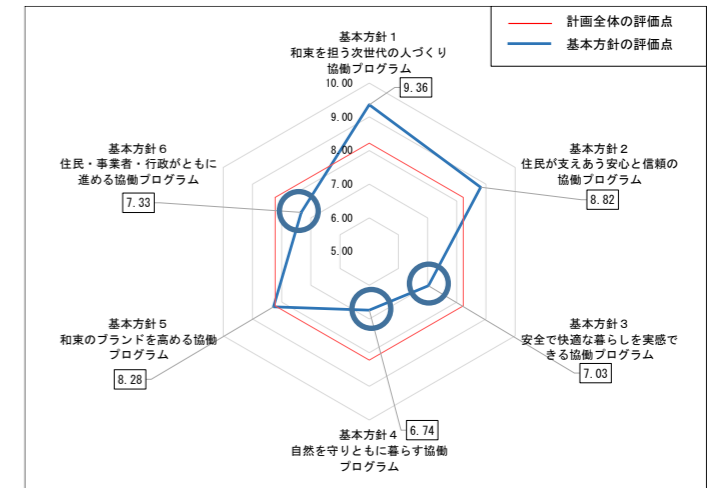
【団体ヒアリング】

- 広域的に捉えると、近畿圏の中心地にあり周辺に大きな大都市がある。その中であって、茶畑を含めて“すてきななか”の環境を有していることが特徴である。
- “お茶のまち”として和東町はあるが、今後の地域産業としては「お茶+α」の複合的展開を考えるべきである。
- 教育観光やインバウンドで着実に実績を上げつつあり、この流れをまちづくりの活性化にいかにつなげていくかがポイントとなる。
- 令和5年度に犬打峠のトンネルが開通するが、そのインパクトをプラスにするかマイナスにするかは、今後のまちづくりに大きくかかわってくる。
- プラスにするためには、“和東の強み”を最大限に生かし、「訪れてみたくなるまち」「住んでみたいまち」と思われる魅力的なまちづくりに取組む必要がある。
- 和東町には人材（プレイヤー）はたくさんいるし、様々な団体が各種活動を展開している。しかしながら、まだ、バラバラの展開であり、小さな力を一つにまとめ大きな力にする仕組みづくりが弱い。
- 今後は、犬打峠トンネル開通後、また、アフターコロナの時代状況を見据えたまちづくりのビジョンを明確にし、小さな力をまとめて大きな“和東の力”にする官民連携の仕組みづくりによるまちづくりが必要である。

4 第4次総合計画の評価

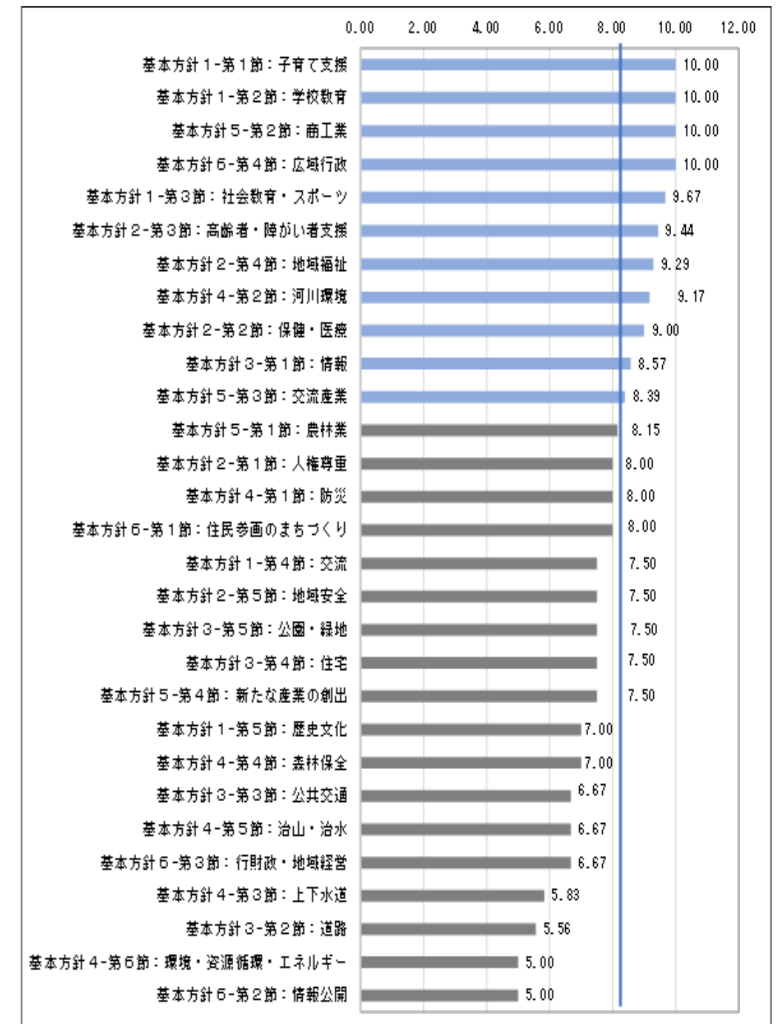
【現行計画の進捗度評価について】

- この評価は、現行計画の施策に対し、町担当課で自ら評価したものである。
- 全施策評価の総合平均点は10点満点で評価結果の平均点は「8.22」と概ね計画通りの進行にはあると評価されている。
- 6つの基本方針レベルで見ると、次の3つが平均点以下となっている。
 - ① 基本目標4 自然を守りともに暮らす協働プログラム (6.74)
 - ② 基本方針3 安全で快適な暮らしを実感できる協働プログラム (7.03)
 - ③ 基本方針6 住民・事業者・行政がともに進める協働プログラム (7.33)



【各基本方針に紐づく「節」レベルでの評価】

- 29の節で、平均点以上の節は10あり、基本方針1や2に関するものが多くなっている。
- 平均点以下の施策は19あるが、得点7.0未満のものは次のものとなる。
 - ① 公共交通 (6.67)
 - ② 治山・治水 (6.67)
 - ③ 行財政・地域経営 (6.67)
 - ④ 上下水道 (5.83)
 - ⑤ 道路 (5.56)
 - ⑥ 環境・資源環境・エネルギー (5.00)
 - ⑦ 情報公開



- この結果は、住民の評価とも概ね一致するものであるが、「基本方針3-情報」については、町の評価では平均点以上の「8.57」となっており、情報が果たして住民十分に届いているのか、という視点で再検討する必要があると思われる。

＜総括としての強みと弱み＞

強み

- 近畿圏の中心に位置する、自然環境豊かな地域である
 - ・半径 100km 圏域に 5 つの政令指定都市を有し、且つ町の大半が自然環境と茶畑に囲われたまさに“茶源郷”の環境を有している。
- 宇治茶の里として質・量ともにトップクラスの茶産地である
 - ・京都府の荒茶の生産量の約 5 割を占めている。
 - ・生産額は概ね横ばいで約 30 億となっている。
- 子育て支援が手厚い
 - ・各種の子育て支援策が非常に充実している。
- 観光が活力を増している
 - ・教育観光やインバウンドの観光客を受け入れ、入込客数は約 18 万人（平成 30 年）で、高い伸び率を示している。
- 人材が豊富である
 - ・転入者等を含め多彩な人材が様々な活動を展開している。
- 犬打峠トンネル開通により、交通条件は大幅に良化される
 - ・交通条件の改善により、茶の販売や観光の誘客に寄与する
 - ・周辺都市との時間距離短縮により、住民の暮らしの安全や雇用の場の拡大が期待される。

弱み

- 少子高齢化が着実に進行している
 - ・特に合計特殊出生率（平成 30 年 0.94）が特に低い。
- 町域も広く中山間地も多いことから町内移動が厳しい
 - ・湯船や木屋地区は町中心部から遠く、信楽町や木津川市との繋がりが強い。また、高標高の斜面地に形成されている集落も多く、生活交通や買い物等の利便性の確保が難しい地区が多い。
- 基幹産業の後継者問題がでている
 - ・後継者問題と合わせ、耕作放棄地もかなりみられる。
- 財政基盤が脆弱化しつつある
 - ・人口減少や産業力低下に加え、福祉を含めた財政需要は拡大化しており、メリハリのある財政投資が求められる。
- 地域内連携が十分には形成されていない
 - ・多彩な人材や各種の団体活動があるが、連携が不十分である。
- 和東町のアピール力が希薄である
 - ・茶業界では知名度はあるが、一般には和東町に対する認識は希薄である。
- 交通条件の良化は流出要因にもなりえる
 - ・犬打峠トンネルは、町から流出を促す要因にもなりかねない。

5 次期総合計画策定に向けたまちづくりの課題

和東町の近年の動向や住民の声、さらには時代の潮流を踏まえ、次期総合計画策定に向けた和東町としての主な課題について、一つのたたき台として以下のように集約してみています。
 今後、各種会議等の意見を踏まえ、内容の精査をおこなっていくものです。
 ここでは、今後のまちづくりを展開していく上での基本的な課題として4つを、またテーマ別に個別的な課題として7つを掲載しています。

